

新しい年度が始まりました。今年は3年ごとに厚生省から出される介護報酬改定の年でした。今回の改定では高齢者と障がい者の共生の考えを取り入れたという点で、以前から共生を訴えてきたまごころとしては、ぎりぎり合格点の改定でした。国は財政事情からも在宅を懸命に進めています。私たちも高齢者も障がい者もすべての人が、最期まで住み慣れた地域・自宅で過ごすことを目指して、いろいろな活動を繰り広げてきました。しかし、それには家族の介護力向上や在宅支援施設の充実だけでは不十分だと思ふようになりました。それは、医療面での課題です。



天神山ガーデンでのひととき（その1）

高齢者に病気はつきものですが、病院に連れて行くのは一日仕事。その上慣れないことで精神的な負担も出てきます。そこで考えられるのは、病院に連れて行くのではなく、医者に来てもらうという方法です。いわゆる訪問診療、往診です。今は病院に行くというのが一般的ですが、もっと気軽に往診を頼めるようになればいいだろうなと思うのです。その方が長い目で見るとずっと合理的だし、普及すれば家で最期を迎える人はもっと増えることになるのです。

最近見た統計によると、日本人の平均寿命は男81歳・女87歳ですが、健康寿命は男71歳・女74歳です。つまり大雑把に言うと元気でいられるのは、男性は70歳、女性なら75歳。それを過ぎると、体になんらかの不都合が生じて病院のお世話になるということになります。そして80%の人が自宅で最期を迎えることを希望していますが、実際自宅で最期を迎えた人は12%しかいないとありました。

今は医学の進歩により、死亡原因のトップである癌でさえも、痛みをコントロールできる薬の開発が進み、希望すれば最期まで自宅で過

すことが可能となりました。末期がんの人が自宅で最期を迎えたという話もよく聞くようになりました。歌舞伎役者・市川海老蔵さんの伴侶真央さんが自宅で最期を迎えたという話はまだ記憶に新しい出来事です。



天神山ガーデンでのひととき（その2）

7年後の2025年には団塊の世代が75歳となり、3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上、10人に1人が認知症になるという統計もあります。いよいよ老老介護、認認介護の到来です。病を持ちながら生活する人が多くなり医療の対応が欠かせないものとなります。そして次第に歩けなくなり、寝たきりになる人も出てきます。このような状況の中で、在宅を推進するには、「在宅生活支援のための医療」が必要だ思うのです。病院が「治す医療」だけではなく、「支える医療」つまり病を抱えながら自宅で生活する人を支援する機能を充実させなければ、在宅は成り立たないと思うのです。

政府はしきりに「かかりつけ医」を持つように進めています。身近にいつでも看てもらえる医者がいるのは心強いです。歳をとり、外出が



はなもも全開（満開）の様子



娘と孫のコンサートを聞いて感涙

難しくなったときに必要な医療は、訪問診療しかも看取りを考えると24時間体制の医療です。普段からお世話になっている医者が往診してくれ、最期を看取ってくれる。これほどありがたいことはありません。

私の義母は自宅で人生の最期を迎えました。それを可能にしたのは、まず、自宅と職場が近く、仕事をしながらいつでも駆けつけられるという環境にあったこと。またデイサービスやホームヘルパーの力を沢山借り、家族を含めた介護の連携がうまくいっていたことが考えられます。更に医療の力も欠かせないものでした。義母は癌治療を終え退院した時から、かかりつけ医の紹介で24時間対応の訪問診療を受けていました。定期的な往診と共に日常的に訪問看護も受けていました。定期的な往診は当然のこと、何かあれば医者が駆けつけてくれるというのは大きな安心でした。訪問看護の方からは、最期の時にはどのように様子が変わっていくかも教えてもらいました。その話と義母の状態を照らし合わせ、慌てることなく対応することが出来ました。このような医療支援があったから、私たちは仕事を続けながらも、自宅で安心して看取ることができたのだと思います。残念ながら、魚津では往診をしてくれ病院は少なく、まして24時間対応の病院はほとんどありません。これからの在宅を支えるためには、介護の世界だけでなく病院も頑張ってもらわなければならないのです。私は5月末で抗がん剤治療終了から1年になります。幸い今のところ元気に過ごしていますが、大阪で癌の経過観察をお願いしている大学病院からは近くでかかりつけ医を持ち、定期的に診察を受け、普段の健康管理をするように言われています。これから先のことを考えて、病院を選ぶときには、評判と共に往診してくれるというのを選択基準にしました。

考えてみれば、医療費の国家負担を減らすため、国はいろいろな方策を出してきました。急性期の治療が終われば退院を促す。入院の最大日数の制限等々。介護だけでなく医療の面でも、在宅を推奨しています。この点から考えても、「在宅を支えるための医療」としての具体的な工夫・改革が医療関係者の課題となってくるのではないかと思います。

この2月大阪で高熱を出しかかった病院で、「処方薬を配達いたします。〇〇処方箋薬局」の張り紙を見ました。受診後、処方された薬をその〇〇薬局に連絡すれば、そのまま待合室で待っていると薬が届けられます。薬局に薬を取りに行かなくてもいいのです。病人の視点にたった工夫が感じられて嬉しかったです。いろいろな課題や問題点もあるのですが、「支える医療」を進めようとしている人たちがいるというのは頼もしい限りです。

残念ながら「家で親を見るのは大変だ。無理だ」という家族の思いはまだまだ強いです。社会の体制が整い、「家で介護してみようか」と思う人が増えて欲しいと思います。

2025年「5人に1人は75歳以上」の時代はもうすぐです。



裏庭に何と一本のつくし!

| 5月の行事予定 | |
|---------|-----------|
| 7日 (月) | ハーモニカ演奏 |
| 10日 (木) | 小物づくり |
| 15日 (火) | 歌謡ショー |
| 19日 (土) | お菓子・惣菜づくり |
| 22日 (火) | 民謡と三味線演奏 |
| 25日 (金) | ピアノ演奏 |
| 28日 (月) | 食事会 |